

ラットランド・アピールをもう一度読んでみる —同志社の原点を考える—

同志社社史資料センター

はじめに

今から150年前の1874年10月9日、アメリカ合衆国のヴァーモント州ラットランドにあるグレイス教会で、アメリカン・ボードの第65回年次大会が最終日を迎えていました。この日、新島襄は日本に向かう宣教師としてあいたつのため登壇し、その壇上で聴衆に向かって宿志を吐露し、5,000ドルの寄付の約束を得たと言われています。この寄付の約束が、翌年に開校した同志社英学校開校の原資となりました。

この時に新島が話した内容に関しては、それを語る人によって内容が少しずつ異なりました。学校の設立を訴えたという人もいれば、大学の設立を訴えたという人もいます。あるいは、日本の教育の重要性を訴えたという人もいます。新島が実際に話した言葉を現代人の私たちが正確にト

レースすることは困難ですが、現地の新聞や新島自身が書き残した草稿や文章の中に、ラットランドの話が挿入話としてしばしば登場します。本稿では、ラットランド・アピールから150年となる今だからこそ、同志社が創設される発端となった新島のアピールを振り返り、同志社の原点を考えるきっかけを提供したいと考えています。

現地新聞が報じた新島のアピール

新島のアピールを記していることでよく知られた資料の1つに、ラットランド・ウィークリーという地元の新聞があります。この新聞には、新聞記者が聞き取り、理解した新島の言葉が書かれています。学校設立に関する内容は次の通りです。

The church in Kobe has no educational institution

(以下波線、筆者付記) , but she must have something of the kind. It is repulsive to the Japanese mind to beg, but I fear we must beg for that, for Christ says, ask and ye shall receive. Therefore I ask you to give help enough to start this training institution, to raise up teachers and preachers to help some 33,000,000 people.

The Rutland Weekly Herald, October 15, 1874 からの引用



伊谷賢造「寄付を訴える新島」1965年

神戸の教会には教育施設がないため、教師や伝道者を育てる施設を始めたいという趣旨で発言が受け取られています。この記事からは学校の目的はわかりますが、学校の種類まではわかりません。執筆した記者が、新島が日本で設置したいと考えていたものが何か、はっきりと認識していなかったように考えられます。いずれにせよ、この時の新島の演説が、年次大会に集まった人々の心を打ち、5,000ドルに及ぶ寄付の約束が集まったことは事実かと思えます。

また、同志社英学校開校時から5年ほどの間、新島が使用していた帳簿（新島遺品庫資料 上0247「同志社出納簿」の最初の収支には、1月1日と日時が付され「On hand from American Friends 5,000.00」とあります。こうした事実からラットランド・アピールの成果は同志社英学校開校の基礎になり、運営に大きく貢献したことが窺われます。同時に、このアピールは同志社最初の募金活動

"Doshisha"
Received (1875) Paid

	Received	Paid	Emp.	Sum
Jan 1 st	on hand from American friends. 5,000.00	1 bank school land	550	00
		out. Davis salary	100	00
		Nov. " "	100	00
		" " rent	10	00

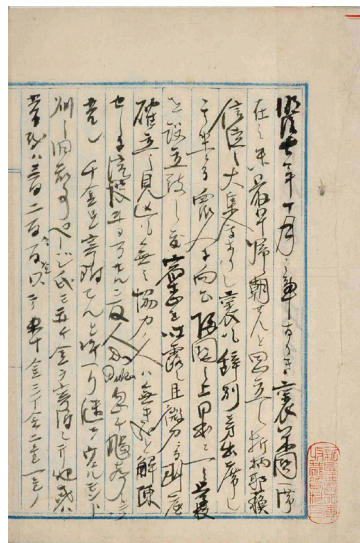
「同志社出納簿」(部分) 1875年

であり、新島の成功体験となりました。

学校の設立か、大学の設立か

以降、新島はラットランド・アピールにまつわるエピソードを様々な場所で披露しています。最も古い記録の1つに、英学校開校から3年目の1878年4月27日付でまとめられた、外務卿寺島宗則に宛てて書いたとされる弁明書の草稿（新島遺品庫資料 上0077「同志社経営に關して政府への弁明」1878年4月27日付）があります。この草稿を読むと、同志社に対して、外国資本に頼るばかりに、その出資者の傀儡になっているのではと、政府から疑義が呈されたことが見えてきます。この草稿中でラットランド・アピールが冒頭で使用されました。そのうち、学校に關する記述は次の通りです。

明治七年十月之事なりき、襄米國へ滞在之末最早帰朝せんと思立し折柄耶蘇信徒之大集会ありし、襄も辞別旁出席し其坐二而衆人に向ひ、帰國之上日本ニ一之学校を設立致し度宿志を吐露し、且微力ニ而到底確立之見込も無之協力ノ人ハ無き哉と開陳せしに（後略）

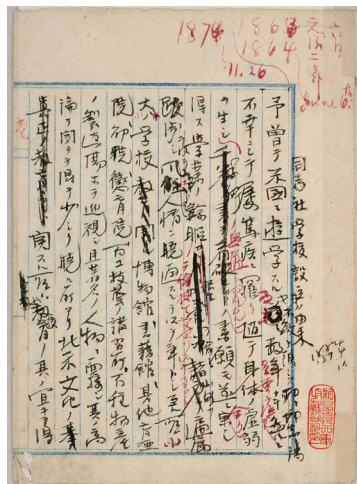


弁明書草稿1878年4月27日付

『新島襄全集』第1巻9頁

米国からの寄付は、受け取った以上は同志社の所有にするものであり、寄付者の意志は介在しないことを、新島はこの草稿に明記しています。そして、その寄付の成り立ちを説明する際にラットランド・アピールのエピソードを利用しています。この時の表記は「学校」でした。また文字通りの意味というよりも、学校としての同志社英学校、そして、その英学校を設立し運営している結社同志社を指しているようにも受け取れます。

ところが、ある時点を境に表現が統一されていきます。1882年11月に新島がまとめた草稿に「同志社学校設立



草稿「同志社学校設立ノ由来」1882年11月

ノ由来」という手書きの資料があります。同志社設立に至る経緯をまとめた資料で、海外で広めた見聞から教育の重要性に気が付いたことや岩倉使節団随行の経験、ラットランド・アピールの内容とその時に起きたエピソード（2ドールを寄付した農夫と寡婦などをまとめています。そのうち、アピールに使用した学校に該当する箇所は次の通りです。

（前略）予ノ朋友過半其ノ会ニ趣ケルヲ以テ、予ヲ勸メ其会ニ臨マシメ予ヲシテ契「訣」別ノ詞ヲ述シム、予敢テ之ヲ辞セス、遂ニ壇上ニ昇リ数千ノ聴衆ニ向ヒ予ノ平素ノ願望ヲ吐露シ、真正ノ教育ニヨラサレハ真正ノ文化ハ期シ難ク、我同胞三千万ヨノ幸福ハ一ニ教育ノ其ノ宜ヲ得ルニ

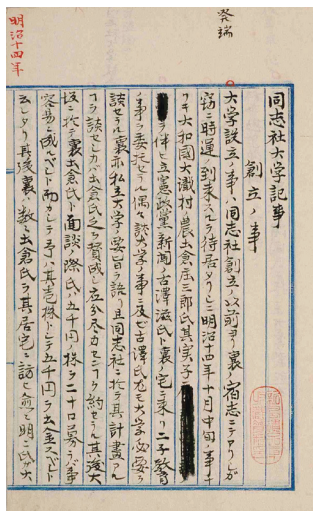
係ルヘケレハ、方今本邦維新変更ノ際苟モ本邦ヲ愛スルノ士人ニシテ豈傍觀坐視スベケン、予帰朝ノ後必ラス一ノ大テヲ設立シ以本邦ニ竭ス所アラントス（後略）

『新島襄全集』第1巻33―34頁

新島はこの草稿を作成する際に、それまで書き残していなかった事柄をいくつか盛り込みました。そのうち、ラットランド・アピールとの関係で、新島は岩倉使節団随行の際に欧米諸国を訪問する中で教育と文化の進歩に関連性を見出し、「何ツカ帰朝セハ一ノ私立大学ヲ設立シ、我邦家ニ竭サンコトヲ望ミ」と記しています。新島は西欧文明と教育との関係、この関係に寄与する大学の存在意義を確信したことを大学設立の動機としています。この言葉通り解釈すれば、ラットランド・アピールを実施する前に、新島は大学設立を期していたと考えることもできます。

大学設立運動を本格化させたきっかけの1つ

残された新島の資料を見る限り、1882年11月以降、「学校」としていた表現が「大学」に変わります。その理由の1つが、草稿作成の9ヶ月前の出来事が関係している



「同志社大学記事」年不詳

ように考えられます。新島の日記『日抄』には、1882年1月12日の項目に、「此夜、土倉氏、法学ノ為予二五千円ヲ投スル事約セリ」とあります。土倉氏とは、土倉庄三郎を指します。土倉は吉野の山林で財を成した人物で、自らの子弟を同志社に学ばせた人物です。その土倉が法学のために5,000円を投じる約束をしたとあります。もう少し具体的な記録が『同志社大学記事』（新島遺品庫資料上0032「同志社大学記事」年不詳）にあります。最初のページに「創立ノ事」、上部に「発端」と記され、大学設立を考えるに至る文章が続きます。そこには1881年10月中旬に土倉と古澤滋が新島の自宅を訪れた際に、「偶々談大学ノ事ニ及ビ古沢氏尤モ大学ノ必要ヲ談セラル、襄亦私立大学ノ要旨ヲ語り且同志社ニ於テ其計画アル事ヲ

談セシカバ土倉氏之ヲ賛成シ応分尽力セン事ヲ約セラル」とあります。この後に新島は土倉と大阪で会ったようで、「五千円ノ株ヲ二十口募ラバ事容易ニ成ルベシト、而カシテ予ハ其一株トシテ五千円ヲ出金スベシ」と記し、5,000円という金額の根拠がわかります。これらの記録は、新島の自筆ではありませんが、新島の行動を記録させたものです。その後、1882年1月に新島が土倉から寄付を約束されたということになります。ここから、新島の大学設立運動が始まったと考えられます。

同志社大学設立運動で使用されたアピール

以降、新島は大学設立運動、言い換えれば大学設立の賛同者を求め、寄付を集める運動を展開していきます。その際に同志社を紹介する文章として作成された冊子の1つに「同志社設立の始末」（新島遺品庫資料上0004「同志社設立の始末」1883年4月）があります。

この冊子は、大学設立運動開始直後の1883年4月に発行されています。その内容は、新島の密出国から山本寛馬との同志社結社までです。そして、この冊子では、これまで概要しか述べていなかったラットランド・アピールの

内容が詳しく記されました。該当箇所は次の通りです。

凡そ何れの国を問はず苟も真正の文化を興隆せんと欲せば須らく人智を開発せざるべからず、社会の安寧を保全せんと欲せば必ず真正の教育に依らざるべからず、方今我邦日本に於ては現に戊辰の変乱を経て旧来の陋習を破り、封建の迷夢を醒して明治の新政を行ふの際、社会の秩序破れ紀綱紊れ人心帰着する所を知らず、今日に於て我日本に真正の教育を布き、以て治国の大本を樹立し以て人智を開発し、以て真正の文化を興隆せんと欲せば宜しく欧米文化の大本たる教育に力を用ひざる可らず、回顧すれば今を去る十一年前、襄の郷国にありしや当時の国勢日々に危きに瀕するを觀て憂憤の心に堪へず、慨然五大洲歴遊の念を發し、一片訣別の辞もなく父母弟妹郷友に別れ衣食住の計もなく、幕府の大禁を犯して一身の窮困を顧みず愈々蹶て愈々奮ひ生命を天運に任せて成業を万一に期し、孤行単立長風万里の波濤を越へ遂に貴国（アメリカ、執筆者註）に渡米せしも亦、只真正の開明文化と真正の自由幸福とを我日本国に來さんことを祈るの丹心に外ならず、顧ふに我邦同胞三千余万将来の安危禍福は独り政治の改良に存せず、独り物質的文明の進歩に存せず、一に教化の烈徳其力を効し教育の

方針其宜を得ると否とに係はること昭々乎として復た疑ふべきに非ず、今や襄貴国紳士諸友と袖を分て恙なく我国に帰るを得ば必ず一の大学を設立し、之が光明を俵りて我國運の進路を照し、他日日本文化の為に聊か涓埃の報を効す所あらんとす、嗟呼満場の聴衆諸君よ襄の赤心寔に是の如し、誰か襄が心情を洞察し幸ひに斯の一片の素志を翼賛する者ぞ

『新島襄全集』第1巻 73—74頁

新島が主語となつて作成された文章であり、冊子の責任者として新島の名前があり、文章が新島を主語としていることから、この冊子の内容は新島が監修したと考えられます。最初に紹介したラットランド・ウィークリーの内容とはずいぶんと異なり、具体的な叙述が増していますが、およそ9年前のアピールの内容をまとめていることを考慮すれば、内容に相違があることは、ある意味で当然かと思えます。あるいは、事前準備なく実施したアピールの内容が、帰国後にことあるごとに披露することで、論理的にまとまつていったのかもしれませんが。

このアピールには続けて、約5,000ドルの寄付の約束を取り付け、2ドルを寄付した農夫と寡婦のエピソード



同志社が準備していた大学用地（大学所有地）
「同志社所有地明細図」（部分）1890年

必ず一の私立大学を設立し、以て我が国家の為に微力を竭さんことを誓ひたりき」、そして、ラットランド・アピールの際には「誓つて此の事業に向つて微力を尽さんことを欲す」と表現していま

にも言及しています。大学設立運動開始当初から、新島はアピールに続く一連の出来事を同志社のルーツの説明として活用していたようです。

おわりに

同志社大学設立運動において、以降もラットランド・アピールは使用され、「大学」という言葉が使用されます。同志社関係者にはよく知られた資料「同志社大学設立の旨意」では、「大学」という言葉は使用されていませんが、岩倉使節団と欧米を歴訪したことで「他日我邦に帰らば、

す（『新島襄全集』第1巻、131頁）ここにある「事業」が大学設立運動であることはタイトルからも文脈からも明らかです。

新島がラットランド・アピールで述べた言葉が、「学校」か、「大学」かを正確に把握することは難しく、また、新島自身の言葉の使い方も一定ではないことは資料が示す通りです。しかし、ラットランド・アピールの内容が、密出国の動機や岩倉使節団での体験と結びつき、次第に洗練されていく様を資料で追っていくと、かつて考えていたこと、言葉にできなかったことが後に付け加えられているようにも見えます。それほど新島在世中の同志社は、将来像を描くことができるほど財政的にも、教学的にも、学生数の点においても大きく発展していました。今回紹介したラットランド・アピールを順序だててその成り立ちや内容を理解することは、新島が目指した同志社大学の本質を理解する一助となるのではないのでしょうか。

※掲載資料はすべて同志社社史資料センター所蔵